



●αオス(ボスザル)の集団で果たす役割

筆

者の住む大分市のはずれ、別府市との境に高崎山自然動物園があります。ニホンザルが生息していることで有名な自然公園です。高崎山には古くから野生のサルが住んでおり、終戦直後にはその数が増えて、近くの農作物への被害が深刻となりました。そこで、当時の大分市長が逆に餌付けをして観光資源として利用しようとしたのが始まりです。餌付けが軌道に乗った1953(昭和28)年に正式に開園し、高崎山は阿蘇国立公園(現在の「阿蘇くじゅう国立公園」)に指定され、高崎山のサルとサル生息地が国の天然記念物に指定されました。この高崎山は、宮崎県の幸島と並んで「日本のサル学発祥の地」ともいわれ、「ボスザル」という呼称を日本で最初に使った場所としても知られています。群れの中で順位の最上位の個体を指す呼称は、いまでは「ボスザル」から、「ボス」という言葉がよくないということで、「αオス」に改められています。ここに、現在は全部で1600頭ほどのサルがいるのですが、αオスに率いられた3つの群(A, B, C)に分かれていたものが、現在ではB群とC群の2つの群になっています。

サルに餌付けを行う「サル寄せ場」では、観光客は動物園で見るとは異なる檻を隔てずに、自然のニホンザルの生態を見ることが出来ます。筆者のところに各地から訪ねて来られるお客さんの好みは、何とんでも大分名物の「ふぐ料理」が圧倒的なのですが、中には高崎山のサルが観たいという方もおられて、ときにご案内することがあります。そのつど、何らかの新しい発見があり、まさに野生のサルに学ぶことが多いのです。前触れが長くなりましたが、今回はこのことについて少し触れてみたいと思います。

実はこの高崎山で、2011年2月11日にベンツという名前のサルの「αオス(ボスザル)就任式」が行われたのです。このことが地元新聞で紹介されました。就任式といっても、周りの人間が勝手にしていることで、すでにベンツはC群のαオスの役割(つまり、集団としてのC群のまとめ役として、群内での喧嘩の仲裁や他群の攻撃から自群を守る等の役割)を実質的には果たすようになっていたのです。C群の最下位から2位まで上がっていたベンツですが、年下のαオスが衰えていなくなり、自動的に自らがαオスになったということなのです。ニホンザルの世界は、ただ力が強い、喧嘩が強い、ということだけで順位が決まるのではないようで、進化論的にみてサルが人間の先祖だとするとき、集団の安定的な維持に年功序列的システムが大いに役立っていることがうかがえます。

ベンツというサルは、筆者が大分医科大学医学部臨床薬理学教授として赴任(平成元年:1989年)して間もなくの頃、地元新聞だけでなく全国ニュースにもなったことがあり、記憶に残っていました。当時、ベンツはB群のボスザル(当時の呼称)でした。高崎山では9歳という最年少でのボス就任記録を作っていた

のですが、C群に気に入った雌ザルができて、ときどきC群に通うようになりました。そのうちに1週間C群に入り浸るようになり、B群で順位の変動が起きて、B群には戻れなくなり、C群に移って最下位からのスタートになったとのニュースでした。その後、ベンツのことは全く地元でも話題になりませんでした。約20年間の空白を経て、再び新聞紙面を賑わしたわけです。高崎山始まって以来最年長(32歳:人間でいうとほぼ100歳に相当)でのαオス就任だったからです。

●「一日の苦勞は一日にて足れり」

「」のお話を、あるワークショップの席で、筆者が恒例として行っている小話のイントロで紹介したところ、参加者の中から「ベンツを観たい」という方が現れたため、翌朝、さっそく出かけていきました。ベンツは年老いたとはいえ、最上位のαオスにふさわしい風格が備わっているように見えました。仲間内の喧嘩の仲裁を行う際の動きは、機敏で、高齢という歳を感じさせませんでした。そこで新しく気づいたことは、ベンツがB群の最上位からC群の最下位になり、その後20年もかかってC群の最上位に上り詰めた、といった話は、人間の視点からみた「人間の語る物語」であり、サルの世界でベンツは自らの気分のおもむくままに振る舞っていただけで、ベンツに自然に備わった風格と振る舞いがC群の中で順位を上げたのではないかと、ということでした。そもそも、「人間の語る物語」の中では、同じ群の中で最上位から、2位、3位……と順位が付いていますが、サルにとっては、自分の目の前にいるサルが、自分より上位か下位は分かっている(間に餌を与えると、餌とサルとの物理的

な距離には関係なく、必ず上位のサルが餌を摂るので簡単に判別できる)だけのようです。

そこで、サルから学ぶこと、あるいは自然界の生物の生態から学ぶことはいろいろとあるように思いますが、ベンツはかつてB群の最上位からC群の最下位に移ったことを、「人間の語る物語」に出てくるような「後悔」もなければ、C群に移ってその中で最下位になっても、特別に先行きの「不安」もなかったのではないかと、ということです。人間は脳皮質が極端に発達した動物です。そこで過ぎ去ったことを「反省」できるのですが、「反省」はしばしば「後悔」になりやすく、未来に備えて「準備」できるのですが、そのためにしばしば「不安」を惹起するようです。

サルのように「いま、ここ」(「ヒア、ナウ」)で生きる、ということは、「一日の苦勞は一日にて足れり」(マタイ伝)という聖書の言葉にもあるように、古くからの人類の生活の知恵です。筆者の専門とする心身症(ストレス病)の世界でいえば、「うつ状態」は「いま、ここ」で、になりきれずに過ぎ去った過去を引きずっている状態であり、「不安状態」は逆に未来への思いにとらわれている状態、と考えることもできます。人間の脳皮質が独走しすぎて、情動脳や身体が悲鳴をあげている状態、と捉えることもできます。

詩人・翻訳家でありタオイストでもある加島祥造氏が、中国の古典となる老子の言葉と思想を、現代語自由詩の形で紹介しているように、「ヒア、ナウ」を大切に生きることにより、癒しが生まれ、人間に本来備わっている「生命のエネルギー」が自然に発動するのではないのでしょうか。自然治癒力を高めることにもつながってくるように思います。すべては、「いま、ここ」での「一歩」からしか始まらないのですから……。

なかの・しげゆき 岡山大学医学部 卒。大分医科大学臨床薬理学教授、同附属病院臨床薬理センター長、大分大学医学部附属病院院長、大分大学学長補佐などを歴任。大分大学名誉教授。大分大学医学部創薬育薬医学教授、国際医療福祉大学大学院教授を経て現職。日本臨床薬理学会名誉会員(元理事長)、日本臨床精神神経薬理学会名誉会員(元会長)、日本学術会議連携委員、日本心身医学会認定医・指導医、日本臨床薬理学会専門医・指導医、日本内科学会認定医、CRC連絡協議会代表世話人。響き合いネットワーク連絡協議会会長として、医療コミュニケーションを学ぶ全国的なワークショップ(大分、岡山、東京、長崎、山形、湯布院)の企画・運営に携わっている。

